

〔研究ノート〕

ヤルカンド・ハン朝の建国と「聖戦」 ——新疆イスラム教小史⑦——

丸山 鋼二

〔Research Notes〕

The “Jihad” in the Khnate of Yarkand : A Short History of Islam in XinJiang ⑦

Koji MARUYAMA

Abstract

The Khnate of Mogulistan lost its territory and completely drew back into the Tarim Basin south of the Tianshan Mountains under the pressure of Uzbek and Kazakh. Sultan Said Khan, son of Ahmad Khan, defeated Aber Beg of the Doglat powerful clan ruling the Tarim Basin and built the Khnate of Yarkand in 1514. In the early times of the Khnate, Said Khan subdued Sali-Uighur living in the south wild land of Lob Nor in the name of “Jihad”. Thereafter he subdued the Bolor mountainous lands of Hindu Kush Mountains and the Realms of Ladakh and Kashmir. His general, Mirza Haidar advanced the troops further into Tibet. The “jihad” finally had not succeeded, and didn't change their local religions. Haidar Mirza, who was condemned to exile from the Khnate and served Humayun of the Mughal Empire, wrote the historical book “The History of Rashid” for the Khnate.

【目次】

はじめに

1. ヤルカンド・ハン朝の建国：スルタン・サイードの即位
2. ヤルカンド・ハン朝の黄金期
3. ヤルカンド・ハン朝の「聖戦」
 - (1) サイード・ハンの第一次「聖戦」(1517年)
 - (2) サイード・ハンの第二次「聖戦」(1527年)
 - (3) サイード・ハンの第三次「聖戦」(1532～33年)
 - (4) ハイダールのチベット「聖戦」(1533～34年)
4. ハイダールのその後

【キーワード】

ヤルカンド・ハン朝 スルタン・サイード・ハン ミルザー・マフムード・ハイダール
 アブドゥッラシード・ハン 「ラシードの歴史」 サリ・ウイグル ボロル ヌブラ
 ラダック カシミール バルティスターン

はじめに

15世紀末から16世紀前半にかけて、中央アジア(東西トルキスタン)の政治状況には3つの大きな変化が見られた。

まず、キプチャク(欽察)草原に遊牧していたウズベク(烏茲別克、月即別)部が大挙南下し、マー・ワラー・アンナフル(河中)のオアシス農業地帯に侵入して、ティムール朝にとって代わりブハラ・ハン国(1505～1868年)やヒヴァ・ハン国(1512 or 1516～1873年)というウズベク王朝を開いた。そして、中央アジアから追い出されたティムールの後裔たちはインド・アフガニスタン地域に「ムガール(莫卧児)帝国」(1526～1858年)を建国した。

モンゴル帝国チンギス・ハーンの血筋を引くシャイバーニー・ハンは、シル河中流域を拠点に一族を結集し、1500年にはティムール朝サマルカンド政権を滅ぼし、07年には同朝ヘラート政権をも滅ぼして、東はフェルガーナから西はホラーサーン(イラン東北部)にいたる大帝国を築いた。シャイバーニーは北方のカザフ勢力の南下を食い止めながら、西方のペルシア・サファヴィー朝と抗争を続け(シャイバーニー自身は1510年にメルヴ近郊でサファヴィー朝軍に敗れ死亡している)、国内でもサファヴィー朝が支援するティムール朝の王子バーブルの反撃と戦った。

バーブル(全称はザヒールッディーン・ムハンマド・バーブルZahiruddin Muhammad Bour)はもとティムール朝フェルガーナ領の君主であった。バーブルは1500年晩秋にシャイバーニー・ハンに占領されたばかりのティムール帝国の都サマルカンドを奪還している。が、翌年のサリ・プリの戦いでウズベクに敗れ、母方のおじスルタン・マフムード・ハンを頼った。が、03年にはマフムード・ハンもウズベクに敗北、04年自らの領地フェルガーナもウズベクに征服され、帰るべき故郷を失った。やむなくバーブルは200数十人の部下とアフガニスタン方面に転進し、カーブルを征服した。しかし、07年ティムール朝の最後の拠点ヘラートもシャイバーニーに占領され、同朝ヘラート政権も崩壊した。

1510年、シャイバーニー・ハンがサファヴィー朝のシャー・イスマーイールに戦死させられると、バーブルはその機会にサファヴィー朝の援軍を得て、11年サマルカンドを再度奪還した。が、翌年にはウズベクの反撃に遭い、サマルカンドを放棄した。カーブルはサマルカンドを再度奪還しようと、サファヴィー朝の援軍を得て反抗を続けるも、再び敗北した。カーブルに戻ったバーブルはサマルカンド奪還をあきらめ、進出方向を中央アジアからインドに向けた。第6次インド遠征中の1526年、バーブルはパニーパットの戦いでローディー朝の軍勢を破り、デリーやアーグラを征服し、ここにムガール朝を樹立した。

第二の大きな変動は、ウズベク部から分化し他のテュルク系やモンゴル系の遊牧部族と連携したカザフの部族連合(カザフ・ハン国)も、この時期に大発展を遂げ、バルハシ(巴爾喀什)湖、イリ河、セミレチエ(七河流域)の広大な遊牧地帯を領有したことである。ここに、現在にまで続くカザフスタンとウズベキスタンという国家が形成された

セミレチエとはバルハシ湖に注ぐ諸河川の流域を指すが、「七河」が具体的にどの河であるのかは定まっていない。古来、セミレチエは遊牧の適地で、スイアブ(碎葉)やバラサグーン、アルマリクなどの諸都市が成立した。13世紀からモンゴル軍の侵攻や気候の変化もあって都市と農業は次第に衰微しつつあったが、依然として遊牧国家のチャガタイ・ハン国やモグーリスターン・ハン国の所領地であった。その後、コーカンド・ハン国を経て、1867年ロシア帝国が併合してセミレチエ州を設置した。20世紀初頭には中央アジア入植の重点地域とされ、ロシア人農民が移住してきた。

現在は、カザフスタンとクルグズスタンのそれぞれの最大の都市であるアルマトゥとビシュケクが建設されている⁽¹⁾。

カザフ部は、1470年頃にウズベク部に圧迫されて東方に移動したことを起源としている。カザフ・ハン国(1470?－1865年)としてチュー川流域に勃興してキプチャク草原に展開し、モグールやノガイの一部を編入した。ウズベクとは当初より抗争を繰り返していた。ハン国の中心地はシル川中流域右岸にあるトルキスタン市(古名はヤス)であった。ここは、古来からの交易場であり南北の両勢力にとって重要な軍事拠点でもあった。1718年のタウケ・ハンの死後、全カザフを統一するハンはいなくなり、大中小の3つのジュズごとに別々のハンがあらわれ、分裂傾向を強めていった。各ジュズは清朝やロシア帝国に臣属することによって、保護と交易を確保していたが、最終的には1865年ロシア帝国領となった。その後、ソ連時代を経て、1991年カザフスタン共和国として独立し、今日に至っている⁽²⁾。

第三に、これと同時に、これらウズベクやカザフ、オイラートなどの遊牧部族によって中央アジアや天山以北の領地から追い出されたモグール人たちはタリム盆地(南疆)の各オアシスに入り、トルファンを中心とするウイグルistan・ハン家とヤルカンドを中心とする「ヤルカンド・ハン朝」という二つのチャガタイ後王による地方的政権を樹立した。

ヤルカンド・オアシスはカラコルム山脈北側の山岳地帯を集水域とするザラフシャン(ヤルカンド)川がタリム盆地の砂漠平原に流出するところに成立した、水量に恵まれた、タリム盆地の中では一番大きなオアシスである。古くは莎車と記され、ヤルカンドの名が登場したのは11世紀のことであった。ヤルカンドはタリム盆地南縁を走る東西路とチベット・カシミールに通ずる南北路の交差する交易上の要衝として有名であった。18世紀中葉の清朝の征服後は、政治・経済の中心が西となりのカシュガルに置かれたため、ヤルカンドは次第に衰退してローカル化が進み、近代国境の固定化とともに国際交易とは無縁な辺境の一都市に落ち着いた。

ヤルカンドは今日、人口15万人の莎車(シャチョ)県城となっている。広い意味でのヤルカンド・オアシスには5つの県(葉城、澤普、麦盖提、巴楚)が存在するが、中華人民共和国の統治下で行政の中心はオアシス南端のカリガリク(葉城県)にあり、ホータンやチベットへの道路(新蔵公路等)もここを起点にしている⁽³⁾。

ヤルカンド・ハン朝の統治は1514年の創始から1682年に至る168年間で、【表1】のように15代のチャガタイ後王が即位したとみられる⁽⁴⁾。ヤルカンド・ハン朝の歴史は建国とそれに続く黄金時代(1514－1610年)の前期と、地方貴族やホージャ勢力が背後で政権を操り各地の宗王の自立により内部闘争が激化し混戦が続く後期(1610－1682年)とに分けることできる。その後は、イスラム教

(1)『中央アジアを知る事典』平凡社、2005年、285頁の「セミレチエ」の項目。

(2)『中央アジアを知る事典』119頁の、「カザフ・ハン国」の項目。

(3)『中央アジアを知る事典』515頁、「ヤルカンド」の項目。

(4)『中国新疆伊斯蘭教史(第一冊)』254頁では、11代とされている。これは、1)第6代のクライシュ・ハンが執政わずか6日で殺害されたこと、2)第13代のアブドゥラティーフ・ハンも在位が1年未満であったこと、3)第8代のブラド・ハンが第10代として再度即位したこと、4)1680年ジュンガル軍によるカシュガルやヤルカンドの占領により、第15代のイスマーイール・ハンが退位して、イスラムの政教合一の傀儡政権が樹立されたことによって、チャガタイ後王によるヤルカンド・ハン朝は実質的に滅亡したとみなして、第16代のアブドゥラシード・ハンを含めないこと等の理由によると思われる。

スーフィズム教団のカシュガル・ホージャ家が傀儡政権を樹立して完全に権力を握り、18世紀半ばに清朝に征服されるまで白山党と黒山党の派閥闘争に明け暮れていた。

本稿は、第1節でヤルカンド・ハン朝の建国、第2節では初期3代の「黄金時代」、第3節では初代のサイド・ハンが行なった3回の「聖戦」、第4節では、チベット「聖戦」を指揮した名将ハイダールの名著『ラシードの歴史』について述べる⁽⁵⁾。ヤルカンド・ハン朝のイスラム教の状況については、次稿「新疆イスラム教小史⑧」に譲る。

【表1】「ヤルカンド・ハン国の歴代ハン15代」

	ハン名称[中国語表記]／別称	在位期間	在位年数
初代	スルタン・サイド[蘇丹・賽徳]	1514－33年*	19年
第二代	アブドゥッラシード[阿不都・拉失徳汗]	1533*－59/60年	27年
第三代	アブドゥル・カリーム[阿不都・克里木]	1559/60－91年	31年
第四代	ムハンマド[穆罕黙徳汗]	1591/92－1609/10	18年
第五代	シュジャーウッディーン・アフマド [術札丁・阿合買徳蘇丹]	1609/10－18/19?年	9年
第六代	クライシュ・スルタン[忽雷失蘇丹]	1618/19?年	1年(9日)
第七代	アバク[阿帕克汗]／アブドゥッラティーフ ・スルタン[阿不都・立惕甫蘇丹]	1618/19?－30/31?年	12年
第八代	プラド[夫拉徳汗] アフマド・スルタン[阿合買徳蘇丹]	1630/31?－32/33?年	2年
第九代	クルチ[克雷奇汗] マフムード・スルタン[馬合木徳蘇丹]	1632/33?－35/36?年	3年
第十代	プラド[夫拉徳汗]	1635/36?－38/39年	3年
第11代	アブドゥッラー[阿不都拉汗]	1638/39－67/68年	30年(中興)
第12代	ヨルバルス[堯楽巴斯]	1667/68－69/70年	2年[白山党]
第13代	アブドゥッラティーフ	1669/70年	1年
第14代	イスマーイル[伊斯瑪儀汗]	1670－80年	10年[黒山党]
第15代	アブドゥッラシード	1680－82年	2年

【出所】『中央ユーラシアを知る事典』「資料・系図」、557頁。

*同上書では1537/38年とするが、ここでは『中国新疆伊斯蘭教史(第一冊)』および『新疆歴史詞典』704頁、に基づいて「1533年」とした。

(5)本稿は基本的には、『中国新疆伊斯蘭教史(第一冊)』(ウルムチ・新疆人民出版社、2000年)の「第十章 叶爾羌汗朝時期的伊斯蘭教」の「第一節 叶爾羌汗朝的興亡及其統治初期的“聖戦”活動」および「第五節 叶爾羌汗朝時期伊斯蘭教對文化的影響」に基づいている。

1. ヤルカンド・ハン朝の建国：スルタン・サイードの即位(1514年)

東チャガタイ汗国(モグーリスタン西部)のマフムード・ハン(馬哈麻汗、在位1487-1508/09)は、1503年ウズベク部のシャイバーニー・ハン(昔班汗)に破れ、その後殺害されると、3万のモグール人兵士たちはシャイバーニーの軍に編入され、モグーリスタンの領地は完全に失われた。といっても、実際にはその時すでに東チャガタイ・ハン国の政権は存在しておらず、ただモグーリスタン東部を支配していたアフマド・ハン(阿黒麻汗、1485年頃即位)の長子マンスール・ハン(満速児汗、在位1502/03-43年)が引き続きトルファンやチャリシュ(察力失、*chalish*)⁽⁶⁾などタリム盆地北縁の一部の地域を支配していただけであった(これをウイグルistan・ハン家とかトルファン・ハン家という)。マンスール・ハンは権力を取ると、異分子を排除しようと、自分の弟をも迫害した。そのため、二番目の弟スルタン・サイード(蘇丹・賽徳、1487年生れ)はマー・ワラー・アンナフル(河中)に追われた。

スルタン・サイードは14歳の時(1503年)、父アフマド・ハンに従ってウズベク軍に抵抗したが、敗北により捕虜となり、シャイバーニー軍に編入された。のち彼はモグーリスタンに逃げ戻ったが、1502/03年に即位していたマンスール・ハンに再び打ち負かされたため、わずか50数人を連れてパミール山中に逃亡した。行き先のない状況の中で、サイードは従兄のバーブル(巴布爾)を頼ってカーブル(喀布爾)に行き、バーブルの歓迎を受けた。

1511年、前述のようにバーブルは隙を突いてウズベク軍を破り、一時サマルカンドの王位に再び登った。フェルガーナ盆地のアンディジャン(安集延、*Andizhan*)にいたドグラト(杜格拉)部ミール(異密)⁽⁷⁾のサイード・アフマド・ミールザー(賽義徳・阿黒麻・米兒札)もこの機会に挙兵して、フェルガーナ地域を占領し、スルタン・サイードに献呈した。

翌年、ドグラト家のハンとしてタリム盆地に自立していたアバー・ベクル(阿巴拜克)が2万の軍勢をもってアンディジャンを攻撃してくると、双方はアンディジャン近くのトゥトルック(図特魯克)で激戦を展開した。サイード軍は兵士わずか1,500人にすぎなかったが、柔軟な戦術と兵士たちの勇敢さによって、ついにはアバー・ベクル軍を打ち破った。この戦闘を通じて、サイードの名声が振るい、モグールの旧部下たちが続々と帰順してきた。

1514年春の初め、ウズベクの大軍がアンディジャンに迫ってくると、サイードは撤退を余儀なくされ、モグーリスタン(天山以北)へと退こうとしていた。タラス河の上流にあるジョドカン(哲徳干、テュルク語で「七村・七鎮」の意)にまで来た時、サイードは首領を集めて軍事会議を招集し、この孤軍の行き先について協議した。会議では直面する状況を分析して、最終的にはサイード・アフマド・ミールザーの建議を受け入れて、モグーリスタンに退く計画を放棄して、アバー・

(6)「察力失」は明代の呼称で、『ラシードの歴史』では*chalish*と表記。漢唐代は「焉耆」と、清代には「カラシャール(喀喇沙爾)」と呼ばれた。現在は、新疆焉耆県内にある。紀大椿主編『新疆歴史詞典』ウルムチ・新疆人民出版社、1994年、705頁。

(7)ミールはアラビア語の「アミール」から「ア」が省略されたもので、14世紀以後のペルシア語文化圏で用いられた尊称、「貴人」を意味した。この「ミール」にペルシア語の接尾辞がついて「ミールザー」という語が生まれた。原義は「アミールの血筋、王子」のことである。「ミール」と同じく、14世紀のペルシア語文化圏で広く用いられた尊称であるが、「ミール」よりは用法が限定的であったとされる。『岩波イスラーム辞典』949頁の「ミール」の項目、および950頁の「ミールザー」の項目。

ベクルが占拠しているカシュガルの諸城を奪取することを決定した。そこで、まずサイド・アフマドが約5,000人の部隊を率いてトロカルト(托魯伽爾特、詳細は不詳)峠を越えて、カシュガル地区に進攻した。

アバー・ベクルはこのことを聞くとすぐにカシュガルに赴き、急いで城砦を築かせ、子のユースフ(玉素甫)に1,000人の歩兵と騎兵を統率させて城砦の防御に当たらせ、またエンギシャル(英吉沙兒、ヤンギ・ヒサル)でも城の防備を堅めさせ、自身はヤルカンドに戻って軍隊の徴募を行なった。

双方の軍が集中を終えた後、サイドの軍が突然攻撃を開始し、カシュガル軍と城砦付近のウーチバルゲン(烏赤巴爾根)村で激戦を展開した。カシュガル軍は打ち破られると、城砦に退いて立て籠もった。サイドはカシュガル城を包囲させたまま、エンギシャルに攻め入った。3ヶ月後、エンギシャルの住民は城を差し出した。カシュガルの守備軍はこれを聞くと城を捨てて逃げ出した。アバー・ベクルは敗勢を挽回しようと、ヤルカンドで農民の強制徴募を行なっていたが、農民たちの拒絶に遭った。

アバー・ベクルは大勢はすでに定まったと見て、ラクダ数百頭分の金銀財宝や金襴緞子(錦緞)を持って、従者とともに拠点としていたホータン(于闐)から南方のカラングー・ターグ(喀蘭兀塔格、「黒盲山」)へと逃げ込んだ。途中、彼は追っ手から逃れるために、これらの金銀財宝を満載した金入れ袋を河の中に投げ捨てたり、持ち運べない絹綾(シルク)や貴重品の類には火を点けて燃やしたりした後、ラダック山中に逃げ込んだ。アバー・ベクルは山中でサイドの追っ手に捕らえられ、護送途中に斬首された。サイドの軍は引き続きホータンやアクスを攻略し、ことごとくアバー・ベクルの領地を占拠した。この年のラジャブ月(拉札撥月 **Rajab**、1514年6月)に、サイドはヤルカンド城に入城してハン位に即き、チャガタイ後王の地域的政権「ヤルカンド・ハン朝」を開いた。

トルファンのマンスール・ハンとヤルカンドのサイド・ハンは最初、互いの権威を認めず抗争したが、やがて和解が成立し、タリム盆地の東西にハンが並立した。マンスール・ハンは異教徒ヒターイ(契丹=中国)に対する「聖戦(ジハード)」と称して、1524年に肅州を攻撃したりしたことは前稿の「中国新疆イスラム教小史⑥」で述べた。

サイド・ハンは息子のアブドゥッラシード・スルタン(のちハンに即位)とともに草原地帯を確保しようとしたが、ウズベクとカザフの攻勢を前にしてカシュガルやヤルカンドを中心とするタリム盆地西部のオアシスを支配下に置くことができたのみであった。そこで、後述するように、ヤルカンドの東方と南方に対して「聖戦」を行なって、領土と財富の拡大を図った。

また、本来遊牧国家であったモグーリスタン・ハン国であったが、ハン王家はタリム盆地の各オアシスに定住化して都市生活に慣れ、軍事力を担う遊牧民の維持には不可欠の草原地帯を喪失したため、モグール部族の軍事力は低下せざるを得なかった。そこで、軍事力の弱体化を補完するために、新たな遊牧集団が編入された。すでにサイド・ハンの時代、オイラトに圧迫されて南下してきたキルギス(クルグズ)がハンの権威に服していたが、17世紀半ばのアブドゥッラー・ハンの時代には宮廷や地方の要職の多くがクルグズによって占められたり、カラヤンチュクと呼ばれるオイラトの集団が傭兵としてハンに従っていたりした。ヤルカンド・ハン朝の後期に混戦が続き国力が衰退していったのは、ホージャやスーフイズム集団の隆盛という宗教的要因のみではなく、クルグズやオイラトといった新たな武力集団の跋扈にも原因が求められる⁽⁸⁾。

(8)「第六章 中央ユーラシアの周縁化 ②東トルキスタン」、小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、301～302頁。

2. ヤルカンド・ハン朝の黄金期

1533年にサイド・ハンが死去すると、皇太子に指名されていたアブドゥッラシード・ハン[アブドゥッラ・ラシード・ハン](阿不都・拉失徳汗)が継承した。アブドゥッラシード・ハンが即位すると、果敢な措置をとって政権を再び奪い返そうとしていたドグラト家のミールを鎮圧し、同時に主要な都市や街、要塞を自分の子供たちに分封し、地方豪族にとって代わらせた。ここから、タリム盆地を300年余り支配してきたドグラト家という豪族は没落していく。

領地・領民の分封制度はモンゴル遊牧民の伝統的な制度で、アブドゥッラシード・ハンもこのモンゴルの制度を踏襲した。アブドゥッラシード・ハンは常に行脚僧(ハランダール哈蘭答兒)の格好をして地域に入って民情を探り、貴族の反乱を防いだ。しかし、イスラム暦967年(西暦1559/60年)にホータンに巡幸した時、謀反を起こしたアミールによって暗殺された。

次子アブドゥル・カリーム(阿不都・克里木)が即位した後、ホータン宗王だった弟クライシュ(忽雷失)が挙兵して反乱を起こし、ウイグルスタン・ハン家が統治するトルファンに進攻した。カリーム・ハンは派兵してクライシュを討伐し、トルファンをヤルカンド・ハン朝の版図に編入した。ここに1570年頃トルファン・ハン家は滅亡したとみられる。カリーム・ハンはイスラム暦1000年(1591/92年)まで31年間統治したが、ムスリム史家シャイフ・マフムード・チュラス(沙赫・馬合木徳・楚拉斯)の『編年史(ペルシア語写本)』(1676年)では、彼が公正かつ賢明なハンであり、また敬虔なイスラム教徒であり、常に宗教学者や大臣たちとともに国事を討議し、その名声は遠くメッカ(麦加)にまで伝わったと頌えている。

サイド・ハンからカリーム・ハンまで3代のハンが統治した70数年の時期がヤルカンド・ハン朝の「黄金時代」であった。この黄金期には、国内が比較的統一されており、政権が安定し、生産も発展し人民の生活も安定し、ウイグル族の歴史上まれにみる経済・文化の繁栄が見られた。

カリーム・ハンの後に即位したのはアブドゥッラシード・ハンの第五子のムハンマド・ハン(穆罕默徳汗)であった。ムハンマド・ハンの時代に、イスラム教はさらに勢力を広げ、イスラム法はますます人びとをより厳格に支配するようになり、ホージャやスーフイズム集団のヤルカンド王朝への影響力も大きくなった。ムハンマド・ハン(和卓伊斯哈克)を尊崇し、その教派の勢力拡大を支援した。まもなくホージャ・ムハンマド・イミン(和卓穆罕默徳・伊敏)(イーシャンカラン「依禅卡朗」)もカシュガルでその教派勢力を拡大させたので、黒山党と白山党の二つのホージャ勢力による激しい派閥闘争が展開されるに至った。

1603年にポルトガル人エベン(鄂本)がヤルカンド・ハン朝を遊歴した際、ムハンマド・ハンの熱心な歓待を受けている。エベンはその後、1607年に甘粛で病死した。彼の旅行記録の手稿は大部分散逸したが、残存した部分がイタリア人のイエズス会宣教師マテオリッチ(利瑪竇、1552～1610年)によってその著作に書き残されている。それによると、宗教信仰の異なっていたエベンは、しばしばイスラム教徒から集団的な攻撃を受け、イスラム学者マウラー(毛拉)やイスラム法官カーディー(喀孜)との宗教弁論を強要され、改宗を迫られたという。イスラム教の熱狂的な布教の様子が垣間見られる。

ムハンマド・ハンの死後は(1609/10年)、内訌が頻発し国内は大混乱に陥り、短期間(28年間)に前後6人のハンが交替した。諸宗王も次々と挙兵して自立し、長期間各地の混戦が続いた。それは、ホージャ勢力と地方貴族や軍閥勢力が結びついて、政権の操縦者となっていたからである。

混戦・内乱のなか、アブドゥッラー(アブドゥッラヒーム・ハン[阿不都・拉西木汗])の子が統治

するハン国の東部トルファンは相対的に安定しており、次第に強大化していった。1638年、アブドゥッラーは本家プラド・ハンの統治するカシュガルを攻略した。プラド・ハンはホージャ・シャーディー(ホージャ・イスハーク・ワリー [伊斯哈克和卓、12年間東トルキスタンで布教]⁽⁹⁾)の子ホージャ・ムハンマド・ヤフヤーのことがアブドゥッラーに暗黙の支持を与えたのを見て、大勢が決したと判断し、ヤルカンドから国外に逃れた。

第11代アブドゥッラー・ハンが在位した30年間、ハン国はやや強勢を取り戻し、ハン国の境域も初期のレベルに回復し、中興を果たした。清順治12年(1655年)、アブドゥッラー・ハンは清朝に使節を送り朝貢している。しかし、在位の後半には黒山党と白山党の争いがますます熾烈となり、ワラ(瓦剌)部やキルギス(柯爾克孜)部の貴族も衝突に巻き込まれ、ハン国の危機がおとずれた。アブドゥッラー・ハンは長子ヌールッディーン(奴爾丁)を後継者に指名していたが、幼子ヨルバルス(堯樂巴斯)は白山党の支持を得て継承権を要求した。のちヌールッディーンは毒殺され、ヨルバルスは兵を起こしてヤルカンドに進攻した。この時には、アブドゥッラー・ハンには抵抗する力がなかったため、ハン位を放棄してメッカ巡礼に赴いた。ヨルバルスは政権の座につくと(1668年)、ただちに黒山党およびその追隨者に対する血なまぐさい虐殺を行なった。黒山党も失敗に甘んじることなく、各地で抵抗を続け、ワラ部のソング・タイジ(僧格台吉)と気脈を通じて、1670年ヨルバルス・ハンを殺害した。

まもなく黒山党の支持するイスマール(伊斯瑪儀汗)がハン位を奪い取ると、今度は白山党に対する残酷な弾圧を行ない、白山党の首領アーファーク・ホージャ(阿帕克和卓)を国外に追放した。すると今度はアーファーク・ホージャがジュンガル軍を引き入れて天山南路に進攻させ、1680年(清康熙19年)カシュガルとヤルカンドは占領され、タリム盆地に再び政教合一の傀儡政権が樹立された。ここに、チャガタイ後王が建国したヤルカンド・ハン国は滅びたといえる。

3. ヤルカンド・ハン朝の「聖戦」

勃興したイスラム教国の例に漏れず、ヤルカンド・ハン朝もその勢力が強大な時には宗教的熱狂下で「聖戦」を敢行し、その勢力の拡大と財富の獲得を目指した。初代のサイド・ハンも一連の「聖戦」を敢行し、規模の大きな「聖戦」は3回行なったことが知られる。「聖戦」の方向はまずハン国の東の「異教徒」サリ・ウイグル(撒里畏兀兒)に向けられ、その後はカラコルム山脈を越えた南方のボロル(博羅爾、博洛爾)、ラダック(拉達克)、トゥボト(図伯特、チベット本土)、バルティスターン(巴爾提斯坦)とカシミール(克什米爾)に及んだ。これらの地域は社会経済の発展が遅れ、生産力も低く、住民の生活も貧しかった。宗教信仰も蔵伝仏教(チベット仏教)以外に、ヒンズー教(インド教)やイスラム教の諸派(シーア派やスンニー派、イスマールイリー派など)、あるいは拝火教等(拜日教、ゾロアスター教)があり、複雑であった。

(1) サイド・ハンの第一次「聖戦」(1517年)

スルタン・サイドが最初に起こした「聖戦」は、1517年に始めたホータンと中国(「契丹」との間)にいた「サリ・ウイグル」と呼ばれる異教徒に対するものであった。

(9) 『岩波イスラム辞典』891～892頁の「ホージャ・イスハーク・ワリー」の項目。

サリ・ウイグルは歴史上「黄頭回鶻」や「黄蕃」と呼ばれ、大体11世紀後期に形成された。その最初の起源は安西回鶻(亀茲回鶻)の一派で、その後しだいにホータン、アチェン(阿真、詳細は不詳)、韃靼、モンゴル等の部族と融合した。11世紀初めに、カラハン朝(喀喇汗朝)が仏教王国だった李氏于闐国を滅ぼした時、イスラム教に屈することを拒否した于闐(ホータン)の仏教徒が大量にロブノール(羅布泊)の南方からアルキン山(阿爾金山、5,798 m)に至る不毛の地域に逃れたことがあったが、その中には仏教を信奉していたサリ・ウイグルもいた。サリ・ウイグルの仏教信仰はその後も変わることなく、数百年を経て中国の55の少数民族の一つ、ユグ族(裕固族)として生き続けている。

ユグ族は人口約1万2,000人で、ヨグル族とも呼ばれる。自分たちは「ヨホル(堯乎爾)」「シラユグル(西拉玉固爾)」と自称してきたが、1953年中華人民共和国政府によって、「ユグ(裕固)」が民族名称とされた。今日甘粛省の真ん中あたり、肅南ユグ族自治県などに居住している。かれらは祁連山脈の岩山と草原、乾いた砂地に囲まれて遊牧を主な生業とつつ、農業にも従事しながら生活している。馬や牛、羊を育て、夏は山地や草地で家畜を追い、冬は平地の家に住み、というように季節によって住まう場所を変えている。山での住まいは、ヤクの毛で編んだフェルトを何本か立てた杭にかぶせて作る、いわゆる「黒テント」というチベット人と同じような簡易住居を使用している。

ユグ族の言語は歴史的な原因により少し複雑で、一つは「ヨホル語」(西部ユグ語)と称し、アルタイ語系のテュルク語派に属する。もう一つは「アングル(恩格爾)語」(東部ユグ語)と称し、アルタイ語系のモンゴル語派に属するが、一部では完全に漢語と同じ言語が使われ、これがユグ族間の共通語となっている。民族共通の文字はなく、一般に漢字が使われている。

ユグ族の言語が西部のテュルク語派と東部のモンゴル語派に分かれていることは、ウイグル帝国が840年の崩壊後に河西ウイグル(甘州ウイグル)や天山ウイグル(亀茲回鶻)と東西に分散・移住していったウイグル人たちがのちに再び合流・融合したことを示している。この西部のテュルク語派の人々は、すでにテュルク語化していたサリ・ウイグルがヤルカンド・ハン朝の「聖戦」の迫害等から逃れて、甘粛に移住してきた人々の末裔の一部であるとみられる。

ユグ族が今日信仰しているのはチベット仏教最大宗派のゲルク派(黄教、ゲルクパ)である。かれらのチベット仏教の信仰は、明朝の中期頃のサリ・ウイグルの東遷以後とされている。清朝の初め頃に(清・順治年間:1644～61年)、ユグ族地区に初めてゲルク派の寺院、景耀寺が建立され、その前後には康隆寺・転輪寺・長溝寺・水関寺・明海寺・蓮花寺・黄番寺・紅湾寺など9つの寺院が出現した。いずれも青海互助県の祐寧寺の大活仏トグアン・ホトクト(土観呼図克図)が管轄していた。

また、西の方(まさにテュルク語派の地域)の一部では、北方遊牧民特有のハンテングリ(罕点格爾)信仰も健在である。これは、「ハン(罕=可汗)」や「天(テングリ)」といった精霊を崇拝し祖先を祀るシャーマニズムの名残りで、旧暦の1月から2月にかけて穀物や羊を供えて天に祈りを捧げる儀礼が家ごとに行われる⁽¹⁰⁾。

サイド・ハン(罕)はサリ・ウイグル「聖戦」のために自ら軍を率いてヤルカンドを出発したが、ホータンに至った時、健康状態が悪化したため、サイドはヤルカンドに引き返し、部下のミールに「聖戦」を指揮させた。この「聖戦」に関する詳細な記録はなく、『ラシッドの歴史』はサリ・ウイグルの

(10) 覃光広等編著『中国少数民族の信仰と習俗(上巻)』第一書房、1993年、172～181頁、「ユグ族」。松岡格・文『中国56民族手帖』マガジンハウス、2008年、90頁、「ヨグル族」(小林亮介執筆)。

攻撃に派遣されたミールの長(衆異密、最高司令官の意)は2ヶ月間荒原を行動した後、「鹵獲物を満載して安全に帰還した」と述べるだけで、異教徒の状況について何も触れていない。ヤルカンド軍は根本的にサリ・ウイグルと戦闘せず、ただ駐屯したところで欲しいままに略奪しただけであったとみられる。現地の住民たちはすでに軍の矛先を避けて人跡まれな山林に身を隠していた。この「討伐」もサリ・ウイグル人たちの消極的な抵抗に遭ったであろう。

『ラシッドの歴史』によれば、トルファンを支配したユースス・ハン(在位1468/69～87年)、アフマド・ハン、マンスール・ハン(在位1502/03～43年)の時代にも、サリ・ウイグルに対して何度も襲撃したことが記されている。イスラム勢力による絶え間ない征伐と略奪は、サリ・ウイグルの人たちに大きな災難となって、再三のさすらいと移住をもたらした。

(2) サイド・ハンの第二次「聖戦」(1527年)

サイド・ハンは1527年初冬、第二次「聖戦」を組織した。かれは長子アブドゥッラシード・スルタンとミールザー・マフムード・ハイダールを統帥に任命して、ボロル国を征伐させた。ボロル国はヒンドークシュ山脈(興都庫什山)南方の山地国家で、住民のほとんどは山民であったが、ヤルカンド・ハン朝から「異教徒の国家(カーフィリスタン Kafirstan)」とみなされ、侵略された。遠征軍はボロルで「いくつかの血戦」をへて、「戦利品を満載して平穩無事に引き揚げてきた」。獲得した戦利品は「ラクダ5,000頭あまり」であったという。

ボロルはパキスタンの北部、ギルギット(吉爾吉特)やフンザ[罕薩](カリーマバードカマバド)といった街を中心とする地域であると考えられる⁽¹¹⁾。この地域は現在、南西に位置するスカルドゥを中心とするバルティスタン管区とともに、パキスタン連邦政府管轄下の「北方地域」を形成している。ギルギットはギルギット川の河岸段丘上に広がるオアシスで、トウモロコシやコムギを中心とする農産物を産し、野菜も盛んに栽培されている。また、ギルギットはワフジール峠・ミンタカ峠・フンジャラブ峠を境にして中央アジアや東トルキスタンに対する前線基地の位置にあり、イギリスのインド統治時代にはまさにそういう役割を果たしていた。

今日、新疆のカシュガルからギルギットまでフンジャラブ峠を越えるカラコルム・ハイウェイが1978年に開通しているので、ギルギットは中国との内陸貿易の拠点として、あるいは観光の基地として発展している。ギルギットの街中にはジャーマーアトハーナ・バーザールやラージャー・ザーバールがあり、フンザ人や遠くカシュガルから移住してきたウイグル系の人たちの商店が並んでいる。

フンザ人(ブルーショー)はギルギット地区の住民の中で最も勤勉であり、また進取の精神に富んだ人々である。それは、フンザの土地が狭く、人口の増加とともに多くの場面で競い合う生活をしなければならなかったし、さらに外界に出て生活しなければならなかったのが、その理由と考えられている。

フンザ人の起源は定かでないが、北方からの移住民で、イラン系だとする説が有力という。彼らの使用する言語は「ブルーシャスキー語」という非常に特殊な言語で、この付近では全く他との関連性を持たない孤立言語である。

(11) ボロルに関する情報は著しく限られている。譚其驥主編『中国歴史地図集(第八冊・新时期)』北京・地図出版社、1987年、52-53頁の「新疆」の地図に「博洛爾」という地名が載っている。

フンザでは、古くからミールと称する藩王が実権を握り、内政を意のままに動かしていた。本来のフンザはフンザ川北岸のカリーマーバードやアリーアーバードなどのわずかの平地だけであったが、その他の地域はフンザ王国によって平定された支配地域で、ギルギットに近い部分はシナー語を使用するシナーキー地区で、フンザ川の北部における上流部はゴジャール地区といて、数百年前にワーハーンから移住してきたワーヒ人の居住地である。パキスタン政府は独立後も「北方地域」ではイギリスの統治法にならってミールやラージャという藩王や土侯に任せる間接統治法をとってきた。その間接統治法であったミール制は1974年になって廃止されたが、依然としてミールは広大な土地と財産を保有し、いまだに多くの特権を持って、フンザの人々に強い影響を与えている。

ミール統治時代には、シナーキー地区とゴジャール地区に対する税率はフンザ本土の約2倍に及ぶ重税であったので、ゴジャール地区ではミールに対する親しみや尊敬の念は乏しく、1974年にミール制を廃止した故ブットー首相(1979年死刑)に対する人気がいまでも強いという。

フンザの宗教も、住民のほとんどがイスマールイーリー派に属するニザール派内のホージャ派(別名モラウィー派)のイスラム教徒で、現在アーガー・ハーン4世(1936年生れ、1957年即位)⁽¹²⁾をイマームと仰ぎ、この派の宗教指導者として尊敬している。また、フンザのミールはパキスタン北部におけるアーガー・ハーン4世の代理人の地位にあるため、宗教面からもミールの影響力の大きさがうかがわれる。

「ホージャ派」はシーア派のイスマールイーリー派がファーティマ朝の第8代カリフの後継者争いからニザール派とムスタリー派に分裂したが、このうちのニザール派がインドに伝わって形成された。ホージャ派の大部分はヒンドゥー教徒からの改宗者の末裔である。伝承では、12世紀ごろにダーイー(布教者)のヌールッディーンがダイラムからインド西部のグジャラート地方に送られて、宣教活動を行なったことが起源とされる。早い時期から、スィンド、パンジャープ、カシミールなどでも布教活動が行われていた⁽¹³⁾。1840年代に、ニザール派のイランにおける最後のイマーム(指導者)となったアーガー・ハーン1世(マハッラーティー、1804～81年)がイランからアフガニスタンを経てインドのボンベイ(ムンバイ)に亡命・移住、イギリスの保護のもと、66年に富裕な商人コミュニティであるホージャ派内の長の地位を固めたことが、ホージャ派繁栄の始まりとなった⁽¹⁴⁾。

フンザの現在名「カリーマーバード」は、アラビア語のカリーム(アッラーの属性の一つ「寛大な」の意)と、ペルシア語の「アーバード」(町)の合成語である⁽¹⁵⁾。もしポロル国が現在のギルギットやフンザなどの地域に該当するならば、当地はすでにイスラム化した地域であったと思われる。にも

(12) アーガー・ハーン4世は本名、シャー・カリーム・フサイニーはハーバード大学卒業で、オリンピック出場(スキー)の経験もある。パリ近郊エグルモンから世界中に散在する宗徒の指導に当たる。4世はホージャ派が保持していたインド的教義を払拭し、イスラーム中道への歩み寄りをはかるとともに、宗派内部の互助組織を大幅に再構築した。67年には国際的な開発機関「アーガー・ハーン財団」を設立した。社会開発・経済開発および文化振興の分野で大規模な活動を展開するこれらのNGO(非政府組織)・企業群は、アーガー・ハーン開発ネットワークを形成、とくにパキスタンで卓越した影響力を持っている。『岩波イスラーム辞典』6頁、7頁の「アーガー・ハーン」や「アーガー・ハーン3世」の項目。

(13) 『岩波イスラーム辞典』892頁の「ホージャ派」の項目

(14) 『岩波イスラーム辞典』6頁の「アーガー・ハーン」や923頁の「マハッラーティー」の項目。

(15) 「ポロル」についての説明は、広島三郎「カシュミールと『北方地域』」、小西正捷編『もっと知りたいパキスタン』弘文堂、1987年、287～298頁による。

かかわらず、ヤルカンド・ハン朝がここを「異教徒の国家(カーフィリスターン)」⁽¹⁶⁾とみなしたのは、イスラム教の宗派間の対立であったと考えられる。

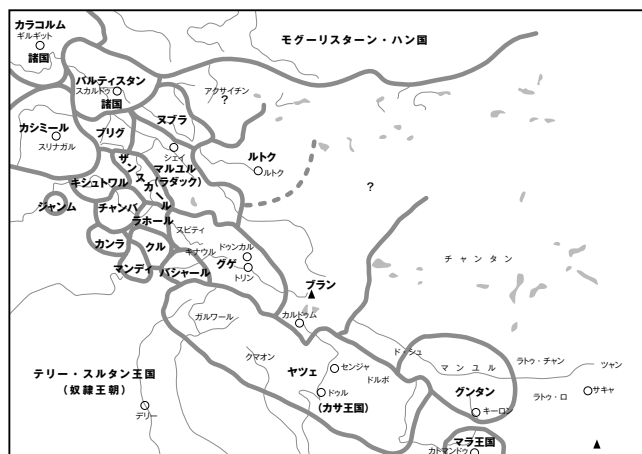
(3) サイド・ハンの第三次「聖戦」(1532～33年)

サイド・ハンは1532年、自らチベットに親征して「ラサの聖廟を破壊する」ことを決意した。このチベットに対する「聖戦」は、新疆イスラム教とチベット仏教との間での大規模な宗教戦争であった。これ以前にヤルカンド・ハン国は数次にわたって遠征軍をラダックに派遣していたが、ことごとく失敗に終わっており、「イスラム側には何の進展もなかった」ため、サイド・ハンには常にかげりなことで忘れることができなかった。

数ヶ月の準備を経て、1532年7月、「聖戦」軍はヤルカンドを出発した。5,000名のモグール人兵士からなる精悍な部隊は南路と東路の二手に分かれて進攻した。南路はミールザー・マフムード・ハイダールとサイド・ハンの次子イスカンダール(亦思干達児)が2,000人を指揮してヌブラを経由してラダックに進攻し、東路はサイド・ハン自身が率い、ホータンを通してドルバ(多爾巴、チベット西北部のアリ地区)への進攻を目指した。当初の計画では、両路軍はそれぞれ通過するルートを手平定した後、チベットのどこかで合流し、それからチベットの中心・ラサに進攻するという作戦であった。

ヌブラ(努布拉Nubra)は、ラダックの中心都市・レーから北にラダック山脈をカルドラン・ラ峠(Khardong La)で越えたところにある、シャヨク川(Shayok River)とその支流ヌブラ川の流域である(【地図1】を参照)。標高は3,200m前後であるが、「緑の園」を意味するヌブラの名に示されている

【地図1】 15世紀ごろのラダック・カシミール地方



出所：高木幸哉著『旅行人ウルトラガイド 西チベット』旅行人、2000年、116頁。

(16)「カーフィリスターン」は「カーフィル」(不信仰者)の「スターン」(国家)という意味である。「カーフィル」とは、クルアーンやハディースでは神罰を受け、最後の審判で火獄に落ちるとされる。ムスリムのなかで誰がカーフィルかという問題は、イーマーン(信仰)やクフル(不信仰)の定義に関係し、神学発生の要因の一つであった。もっとも寛容なのはシルク(多神崇拝)という最大の罪を犯したものの以外は信仰者であるとするムルジャ派であり、大罪を犯したムスリムについては審判を神に任せた。反対に厳格なのは、信仰は罪によって損なわれるとするハワーリジュ派であり、大罪を犯した者はカーフィルとした。両者の中間の立場を採り、信仰者でも不信仰者でもなく、偽善者としたのがムタズィラ学派である。『岩波イスラーム辞典』281頁の「カーフィル」の項目。

ように、緑多く穏やかな土地が広がっている。ヌブラ最大の集落はデスクット(Deskit)で、東はズレの岩山の上にヌブラにおけるゲルクパ・ゴンパの総本山「デスクット・ゴンパ」がそびえている。今日、当地はインドとパキスタンの係争地(いわゆるカシミール紛争)のインド側の最前線となっている。現在レーとヌブラを結ぶ重要な軍用補給道路「ビーコン・ハイウェイ」(1970年代開通)が走っており、ラダック山脈を越えるカルドラン・ラ(5,606m)は「自動車道では世界最高地点」といわれている。

ヌブラはラダックと東トルキスタンとの交易路上にあたり、11世紀以前から中継交易で栄えていた。東トルキスタンからはテュルク系民族がヌブラやバルティスターンに流入していたが、8-10世紀以降に流入し始めたチベット系民族を中核に、ダルド系民族、テュルク系民族などが混血してヌブラの人々が形成されたと考えられている。15世紀前半、チベット仏教の新興ゲルクパがラダック各地で盛んに布教を行ない、その影響をヌブラも受け、以後現在に至るまでゲルクパが優勢な宗派となっている。16世紀後半、ヌブラはラダック王国の属国となるが、1600年頃、ラダック王国がバルティスターンとのバルティ戦争に敗れ一時征服されると、ヌブラにもシーア派イスラム教徒が流入した。とくにハブルーと接するシャイヨク川下流方面はほとんどがイスラム教徒であるという⁽¹⁷⁾。

ラダック討伐を任されたハイダールはカラコルム山脈(喀喇崑崙山)を越えて、まずヌブラに到達した。ヌブラに入ったハイダールは「ムハンマドを遵奉すべし。帰依者はイスラム法に従って納税を免除され、保護を受けられる」と宣伝した。しかし、ヌブラの住民は帰順を拒否し、その首領ブルー・ハーバー(不児・哈巴)は民衆とともに城砦と要塞に立てこもって、頑強に抵抗した。数日の血戦を経て、城砦は相次いで陥落し、反攻した軍民は虐殺され、ヌブラ全域が征服された。ハイダールは守備部隊を残して、ラダック地区の首府・マルユル(瑪峪)に進軍した。武力的威嚇に怯えたラダックの土侯ラータ・ジュジャタン(拉塔・朱戛丹)とダーシーケン(大石昆)は臣服を表明した。

ラダックとはチベット語で「峠を越えて」の意味であるが、この名称が一般的になるのは17世紀以降のことであった。それ以前は「マルユルmar.yul」(チベットや周囲の高山から見て「低地の国」の意)という名称が一般的であった⁽¹⁸⁾。現在、ラダック地方はインド連邦のジャンムー・カシミール州に属している。今日ラダック地方の中心地であるレー(Leh)は、16世紀後半のタシ・ナムギャル王以降からラダック王国の王都となった。それまでの王都はシェイ(Shey)であった。「水晶」という意味のシェイはレーからインダス川上流に15kmさかのぼった上ラダック地方にある旧王都で、ラダック王家発祥の地であった⁽¹⁹⁾。

ラダックにイスラム教が広まったのは16世紀末。先にイスラム化していたバルティスターンから、隣接のプリク(プリグ)にイスラム教シーア派が布教され、プリクの諸王は相次いでイスラム教に改宗した。現在、プリク(カルギル地区)では住民の約8割がイスラム教徒。ラダック地区ではイスラム教徒は少数派で、住民の15%に過ぎない。14世紀にイスラム化したカシミールや東トルキ

(17)高木辛哉著『旅行人ウルトラガイド ラダック：インドの中のチベット世界』旅行人、2001年、73～80頁の「ヌブラ」。

(18)前掲書『旅行人ウルトラガイド ラダック』164頁の「ラダックの歴史」。

(19)前掲書『旅行人ウルトラガイド ラダック』34頁の「レー」、および45頁、48の「上ラダック、シェイ」。ここでいう「マルユル」が実際にシェイか、レーか、あるいは他の都市のいずれを指すのかは不詳。なお、ラダックだけでなく、西チベットも古くは「マルユル」と呼ばれたようである。

スタンの地域から伝わったスンニー派は、ラダックでは大きな勢力とならなかった⁽²⁰⁾。

他方、サイド・ハンの東路軍は、1ヶ月後ホータンからドルバへの道中にあったが、水がなくなり食料が絶たれ、また道が寸断されていたため、一度引き返してハイダールの進軍路を通してラダックに赴くほかなかった。この途上、サイド・ハンは高山病を患い、精力が非常に衰えた。両軍はマルコルで合流した後、サイド・ハンは高山病の心配のないバルティスターンに、ハイダールはカシミールに進攻するという新たな作戦計画を決定した。

ハイダール軍は当初は非常に順調で、隘路を乗り越え、トゥイバット(退擇特)とラル(拉爾)を通して、一路カシミール侵攻した⁽²¹⁾。カシミールの軍隊は噂を聞いて降伏した。ハイダールは「降伏した異教徒たち」を無理矢理に「聖戦軍」に充当し、当地のチベット人をヤルカンド軍の道案内として、カシミールの諸土侯が峠や隘路に設けた防御線を突破した。続いて、彼らは歴史のある当地の王宮(カシミール城)や街を平らになるまでことごとく破壊し尽くし、国庫と土蔵も一つ残らず略奪し尽くした。

しかし、カシミールの軍隊は各地に分散しており、引き続き険要な地勢に拠って守りを固めた。かれらは正面作戦を避けて、常に夜間に乗じてヤルカンド軍をゲリラ的に襲撃した。街の住民も家を捨てて山谷にはいり、空城を残した。そのため、ハイダール軍はまもなく糧秣に事欠き、進退きわまる状況に陥った。また、一部の将領が公然とこの戦争に反対を表明したり、兵士のなかにも水土に慣れず望郷の念が募るものが出たりして、軍心が動揺しだした。兵士たちはハイダールが自分たちを騙したと非難して、戦闘を続けることを拒絶し、故郷に帰ることを要求した。

軍のなかに日増しにはびこる不満の感情は当然のことながら戦闘力にも影響した。まもなく発生した大戦で、双方とも多くの死傷者を出したが、ハイダールは依然として勝利を得ることができなかった。そこで、かれは講和の交渉をおこなった。カシミールの藩王(衆酋長)は全軍の撤兵を条件に、以下のような講和条件を受け入れたが、イスラムへの改宗のみは拒絶した。講和条件は、1)当地のムスリムはサイド・ハンの名を用いてフトゥバ(呼図白)を誦読するとともに、貨幣を铸造すること、2)カシミール人はモグール人に歳賦を納めること、3)藩王の娘がイスカンドール・スルタンに降嫁することであった。

こうして、ハイダールはカシミールを6ヶ月間占領した後、当地を放棄して、ラダックに戻り、サイド・ハンと合流した⁽²²⁾。

「和議がなった後、(ヤルカンドの)中央アジア人は彼らの故郷に引き返し、カシミール(克失迷

(20)前掲書『旅行人ウルトラガイド ラダック』11頁の「イスラム教」。

(21)ここでいう「カシミール」が現在のどこを指すのかは必ずしも明確ではない。ラダックからは西方に位置する、現パキスタンの「アーザード・カシミール」(首都=スリナガル)ではなく、南方に位置する現インドの「ジャンムー・カシミール州」の東部(ザンスカール地方、中心地はバダム)やヒマチャル・プラデシュ州(州都はシムラ)の東部(スピティ地方[中心地はカザ]やキナール地方[中心地はレコンビオ])の山岳地帯のことと思われる。あるいはチベット語で「ンガリ(Nga-ri)」(現在は中華人民共和国の西藏自治区アリ(阿里)地区)と呼ばれた西チベットにあった旧グゲ王国の領域を指すのかもしれない。ザンスカールやスピティはかつてグゲ王国に属したこともあるという。1630年にはラダック王国がグゲ王国を滅ぼして征服し、ラダック領だったこともある。『旅行人ノート①チベット[改訂版]:全チベット文化圏完全ガイド』旅行人、1998年、285～324頁の「ラダック&ザンスカール」。

(22)カシミール進攻に関しては、インドの歴史家フェリーシッタ(費里胥塔)も、年代に出入りはあるが詳細な記録を残しているという。『中国新疆伊斯蘭教史(第一冊)』259頁。

児)は再び平和となった」が、戦争はこれで終わらなかった。バルティスターンに進攻したサイード・ハンは当地のイスラム教徒の支持を得て、首府のブカルバード(布加爾堡)を攻略した。が、まもなく冬となり、大雪で山道が封鎖され、情報が途絶えると、当地の民衆はこの有利な状況を生かして反撃してきた。サイード・ハン軍は全軍恐慌に陥り、まるまる一冬軽々しくは出撃しようとはせず、冬が終わりかけるとそくそくとバルティスターンを離れてヌブラに戻った。しかし、ヌブラの形勢はさらに良くなかった。ヤルカンド守備軍による虐待と搾取は、ヌブラ民衆の強烈な反抗を呼び起こしていた。ヌブラの民衆はカシミールの民衆と同じように、険要の地勢に拠って固く防備した。「当地の民衆は彼らを支配するために派遣されてきた無能の輩をまったく問題とすることなく、捨て鉢の姿勢でのぞんできたので、(サイード・ハン)はヌブラに引き続き留まるのは安全でないと考えて、マルユルに退いた。」

サイード・ハンが攻撃したバルティスターン(Baltistan)はヌブラの北東に位置し、中心地は今日カラコルム登山の基地として知られるスカルドゥ(Shardu)である。ここの住民はラダック(ラダック人)と近縁のチベット系民族であり、言語もチベット語系のバルティ語である。が、住民はすべてイスラム教徒となっている。そのため、チベット人的な風貌を持つ人は少ないという。バルティスターンは南のブリク(ラダック西方)をめぐるラダックとしばしば戦争をしているが、他方では交易を通じて親密な関係が続いている。小さな国々に分かれていたが、16世紀からスカルドゥ王国が強大となり、1600年頃にはジャムヤン・ナムギャル王率いるラダック軍を破り、一時ラダックを属国としている。16世紀後半にムガル帝国に服属し、19世紀にはラダックとともにジャンムー王国に占領されている(のちジャンムー・カシミール藩王国領)⁽²³⁾。

サイード・ハンがマルユルに撤退して間もなく、ハイダールもマルユルに撤退してきた。この時、「聖戦」開始からすでに一年近く経っており、部隊の死傷も激しく、兵士たちの厭戦・望郷の念も強かった。サイード・ハンはもはや作戦を指揮することはできないと考えて、ハイダールを三軍の統帥に任命して、自分はズー・アル=ヒジヤ(祖勒哈吉)の初め(1533年6月末)に帰途についた。部隊がヤルカンドまであと8日の行程にあるスガイティ(素盖提、今日のアクト[阿克陶]県東南のソグティ[色格提])⁽²⁴⁾峡谷への途上、サイード・ハンの病状が突然悪化し、1533年7月9日病死した(47歳)。

(4) ハイダールのチベット「聖戦」(1533～34年)

サイード・ハンの死後、ハイダールは命令に従って、犠牲祭(宰牲節、イスラム暦12月10日)が終わった後にマルユルからラサに向かって進攻した。軍隊は2ヶ月の苦しい行軍を経て、ラサまであと8日間の行程にあるアスターブラック(阿斯塔布拉克)地方に到達した。その途中、ハイダール軍はラマ寺廟を壊し仏教徒を殺したので、チベット人の抵抗に遭った。チベット人の抵抗の中で、後方の輜重部隊がネパール(尼泊爾)の君主がチベット支援のために派遣した「短剣(反曲刀)武装部隊」の攻撃を受けて、少なからぬ人馬と給養を失っただけでなく、ハイダールの実弟アブドゥッラー・ミールザー(阿不都拉・米爾咱)が殺されるという事態も発生していた。さらには、先

(23) 前掲書『旅行人ウルトラガイド ラダック』80頁の「バルティスタン(1)」。なお、バルティスターンの首府とされているブカルバード(布加爾堡)については、それがスカルドゥであるかどうかを含めて、詳細は不詳。

(24) 『新疆歴史詞典』512頁。

頭部隊がロック・ラブーク(魯克・拉布克)という大きな湖の湖畔に駐留している時に、馬が高山病にかかって大量に死亡するという深刻な事態も発生した。アスーターブラックに來た時には、軍隊はすでに疲労困憊の極で、人馬の損失も半数を超えており、行軍・作戦はいわずもがな、生命の維持さえも困難な状況であった。そこで、ハイダールはラサ進攻の計画を完全に放棄して、当地でひとしきり略奪を行なった後、「もと來た道を引き返し凱旋・帰国した」。

1534年初め、軍がラダックに戻った時、ヤルカンドからの使者が新君主アブドゥッラシード・ハンの勅令を携えてきた。勅令は、1)聖戦軍は全軍解散してヤルカンドに戻ること、2)ハイダールの最高統帥の職務を解除すること、3)軍はイスカンドール・スルタンが指揮すること、4)ハイダールら数人は帰国することを認めないことを命じていた。ハイダールは事実上国外追放の身となったのである。こうして、長い間にわたってずるずると引き延ばされてきたチベット「聖戦」は、完全な失敗をもって終わりを告げたのであった。

ヤルカンド・ハン朝ではその後も、サイド・ハンに倣って「聖戦」の御旗を掲げて軍事征服活動を続けた。アブドゥッラシード・ハンも統治の中期にボロル国に遠征を行なったが、ボロル軍民の激しい抵抗に遭って、大敗を喫し、多くのヤルカンド兵士が捕虜となった。そこで、アブドゥッラシード・ハンは再び報復に行き、多くの城砦を破壊し、ボロル国の土侯たちに和平を求めさせて、貢納をヤルカンドに納めさせた。アブドゥッラシード・ハンは兵士に命じて城砦を壊した土石をヤルカンドに持ち帰らせて、「聖戦を象徴する」建造物を造らせた。この建造物は19世紀まで保存されていたという。

ヤルカンド・ハン朝の「聖戦」は結局、財富の略奪だけにおわり、武力をもってイスラム教を広めるというやり方は何の効果もなかった。それらの地域の住民は自分たちの古くからの宗教と習俗を相変わらず保持し続けていたのである。

4. ハイダールのその後

チベット「聖戦」の主要指揮官であったハイダールは、アブドゥッラシード・ハンの指弾を受けたので、故郷に帰ることはできず政治亡命者となり、1536年まずバダフシャン(巴達哈傷)に行った。翌年夏、さらにカブールをへて、その後ラフル(拉合爾)に来て、バーブルの子カームラーン・ミールザー(康蘭・米爾咱)の歓待を受けた。カームラーン・ミールザーは当時、ペルシアのサファヴィー(沙法維)朝君主シャー・イスマール(亦思馬因・沙)と領土を争っていた。カームラーンは軍を率いて出征するために、国監としてハイダールに1年あまり朝政を代行させた。ハイダールは「苦痛の深淵から一躍高貴な高位に上り詰めた」と自ら語っている。

その後、ハイダールはムガル朝第二代皇帝のフマーユーン(胡馬雍、在位1530—40年、55—56年)の軍に2年間仕えた。1540年11月、ハイダールは軍を率いてカシミールを攻略し、フマーユーン大帝の名で当地を11年間統治した。その期間、有名な歴史書『ラシードの歴史』を完成させた。ハイダールのこの『ラシードの歴史』(1547年)は、チュラスの『編年史』(イスマール・ハン在位中の1672—76年に完成)と並んで、ヤルカンド・ハン国期の二大歴史書とされている。

1530年バーブルの死後ムガル朝の第二代皇帝についてのフマーユーンは1540年、パターン王国の復活をになってビハールに地方政權スール朝を立てたシェール・シャーに壊滅的な敗北を喫し、アグラやデリーをも失った。さらに3人の弟たちも離反したため、自身は流浪の末に一時ペルシアのサファヴィー朝タフマースプのもとに難を避けていた(1544年)。翌年、同朝の支援を受けて、

弟のアスカリー支配下のカンダハール、さらに弟カームラーン・ミールザー支配下のカーブルを占領した。その後、カームラーンやミールザー・スライマーン(バダフシヤンのティムール家王子)との闘争が続いたが、パンジャーブを経て、内紛で分裂していたスール朝支配下の北インドに進軍した。こうして、1555年にフマーユーンは再びカーブルからデリーに入ってムガル朝を復興させた⁽²⁵⁾。ハイダールはフマーユーンがインドを追われていた間も、カシミールの地でフマーユーンに忠誠を尽くしていたことになる。

ハイダール(1499/1500～1551年)の全称は、ミールザー・マフムード・ハイダール・ドグラト・クルカン(米爾咱・馬黑麻・海答兒・杜格拉特・古爾干)で、その名の通りドグラト部という貴族名家の出身で、サイド・ハンやバーブル大帝とは従兄弟の関係にあった。彼はすでに当時から「品格高尚にして才能は人に抜きんで、詩文は優美である。こうした天賦の才だけでなく、きわめて勇敢で、大将の風格を備えている」と評価されていた⁽²⁶⁾。

ハイダールもサイド・ハンと同様、幼少の時(9歳)、父がウズベクのシャイバーニー・ハンに殺されたため、カブルに逃れて、1509年から3年間バーブルのもとに身を寄せるといふ辛苦の経験をしていた。その後、サイド・ハンの麾下で仕えていたが、サイド・ハンがヤルカンドを支配するようになると抜擢重用され、多くの官職を歴任した。主に軍隊を統帥し、サイド・ハンの最も親しい部将となった。また、太子アブドゥッラシードの教師もつとめた。ヤルカンド・ハン家のサイド・ハンとウイグルスタン・ハン家のマンスール・ハンという二人のモグール君主が和解する過程で、ハイダールはヤルカンド側の人質としてトルファンに留まり、両ハンの会見・和議で重要な役割を果たした。その後、上述のようにサイド・ハンに従って大小の遠征や「聖戦」に参加した。

チベット遠征失敗後は、亡命者となり、最後にはカシミールで11年生活した。その当時、ハイダールの心情は非常に苦しいものがあり、つねに故郷と親戚を思い、ヤルカンドの命運を注視して親友たちとは連絡を取っていた。かれはヤルカンド・ハン朝の行く末を案じて、強い責任感と使命感をもってモグール人の歴史を編纂せんと決意し、カシミールでの大部分の時間を書籍の閲覧、伝説の整理、史書の執筆に使った。まず1541年から42年頃に回想録を執筆し(遅くとも1544年には脱稿していた)、1547年2月にすべての脱稿を終えた。ムスリム史家の習慣に従って、この歴史書を当時のヤルカンド・ハン朝の王アブドゥッラシード・ハン(アブドゥッラー・ラシード)に捧げ、書名を『ラシードの歴史(タリーヒー・ラシーディ)』とした。書が成って4年後に、ハイダールは逝去した。

『ラシードの歴史』は二つの部分から成っている。第一編は「正史」で、トゥグルク・ティムールがイスラム教を信仰し、東チャガタイ・ハン国を建国するところから、ラシードがヤルカンド・ハンに即位するまでの、約200年近くの歴史を記述している。第二編「史跡概述(簡史)」は回想録で、外祖父ユヌス・ハンから始め、自身がカシミールで経験した重要な事件や人物について主に述べている。原稿はペルシア語で執筆され、書が成ってから間もなくチャガタイ語の写本が作成され、世に伝えられている。

この歴史書の内容はとても豊富で、主にモグール諸ハンの統治を記述しつつ、ウイグル・ウズベ

(25) 『岩波イスラム辞典』854頁、「フマーユーン」の項目。

(26) 前掲書『中国新疆伊斯蘭教史(第一冊)』285頁。

ク・カザフ・クルグズ(キルギス)・ワラという中央アジアの5つの主要民族の政治・経済・歴史・宗教・文化や山川・風土人情にも及び、またチベットやカシミールなどの宗教や民俗についても記述しており、得がたい第一次史料となっている。ハイダールの支配王家や歴史人物・歴史事件に対する記述は脈絡がはっきりしており、その内容は信頼性が高いと評価されている。とりわけ宗教の面では、14-16世紀はイスラム教が東トルキスタンで大発展した時期であるが、ハイダールはトゥグルク・ティムール・ハンがイスラム教に帰依してモグール人の中で強制したことや武力を用いて次々とクチャやトルファン等を占領し無理矢理に住民を改宗させたことから、大規模な「聖戦」のこと、東トルキスタンで活動した早期の中央アジアのホージャ家やスーフイズム等の問題にいたるまで、イスラム教に関して全書にわたって記述しており、新疆のイスラム教の歴史研究に貴重な史料を提供している。

ハイダール自身は敬虔なスンニー派(イスラム法学はハナフィー派)であるが、イスラム教の歴史についても厳粛かつ客観的に記述している。たとえば、当時東トルキスタンの一部地域で盛んとなっていたマザール崇拜の風潮に対して、シーア派の奉じる第六イマームを祀るホータンのキャパル・サディーク(加帕爾・薩迪克)のマザール、ヤルカンドのいわゆる「七賢」マザール(チリーターン・マザール[乞里坦麻札])など、比較的影響力のある「聖墓」が実は偽物で、これらの人物はそもそも東トルキスタンに来たことさえないと明確に指摘している。また、マザールへの礼拝が「奇跡を示す」ことができるという教義にも反駁を加えているなど、ハイダールはまさに「傑出した歴史家」という称号を受けるにふさわしい歴史家である。